－所蔵作品紹介－

上野山　清貢　UENOYAMA Kiyotsugu

水族館

すいぞくかん

作品データはこちら

上野山清貢は1889（明治22）年、札幌郡江別生まれの画家。大正から昭和初期にかけて帝展で活躍しましたが、力強い筆致で対象に迫る独特の画風によって知られます。フォーヴィスムを思わせるその作風は、おだやかな作品が主流を占めていた帝展の中でひときわ異彩を放ちました。

1912（明治45）年画家を志して上京するまでは、庁立上川中学（現・道立旭川高等学校）に学んだり、美深や名寄で代用教員を務めるなど、道北に深いゆかりを残しています。さらに上京後も第１回のヌタックカムシュッペ画会（1919、大正８）に出品するほか盛んに北海道をおとずれ、本道の美術界に大きな影響を与えています。

「僕はよく海底を想像する。魚類の生活の中でもまだまだ吾人の未知の世界があらふ。深海の秘境。それこそ幾千年の永却の謎を秘めた海底に、そこに棲息してゐる奇怪な深海魚はどのようなものだらふ。」

上野山自身がこう語るように、彼は海底の神秘に強い関心を示しています。野生の鶴、牛、馬、魚、風景、肖像など多彩なモチーフを上野山は手がけていますが、南国や海底など幻想的なテーマも同時に見られるのです。水族館をモチーフにしたとはいえ、この作品にはこうした上野山の強い幻想の世界が反映されているといえるでしょう。

旭川美術館だより「氷華」No.10（1985.11発行）「収蔵作品から」より